八郎潟干拓地における社会関係の評価に関する基礎的研究
—社会ネットワーク分析を用いて—
A Fundamental Study on Evaluation of Social Relations in Hachirogata Reclaimed Land: Using Social Network Analysis

○桒原良樹*　中島正裕**　増永佳乃*
○Yoshiki KUWABARA*　Masahiro NAKAJIMA**　Yoshino MASUNAGA*

Ⅰ．はじめに

戦後直後の食糧難という問題に対し，国営干拓事業が全国各所（388 か所）で実施された．そのうち最大規模である秋田県八郎潟干拓地（以下，大潟村）は 1964 年に誕生した．同村は全国から入植農家が集まった定住型干拓地であり，地縁・血縁のない「ゼロ」から社会関係を形成し，農村コミュニティが構築されてきた。

2014 年で生誕 50 年を迎えるが，他の農村地域と同様に高齢化問題や人口減による活力低下が問題視される中，仕事やライフスタイルの等の異なる非農家世帯と共存する混住化社会の形成が期待されている [1]．近年，村営住宅の建設や宅地分譲などにより非農家人口は増加傾向にあり，農家・非農家の社会関係の特性を把握することが必要であると考える。しかし，同村における先行研究 [2)3)4)]では非農家を含めた社会関係の形成過程および構造は解明されていない．

本研究では個人レベルでの社会関係に着目し，非農家を含めた大潟村の社会関係の形成過程および構造を解明することで，今後の混住化社会の成熟に向けた基礎的研究と位置付ける．

Ⅱ．研究手法

本研究では，まず資料調査およびヒアリング調査（農家 8 名，非農家 9 名）を行い，非農家の属性ごとの入村実態を明らかにするとともに，大潟村に存在する社会関係の分類を行う (3 章)．次いで，農家 13 名，非農家 10 名を対象にヒアリング調査およびアンケート調査を行い，個人の社会関係を分析する．この際，「社会ネットワーク分析（以下 SNA）」（分析ソフトには「UCINET 6」を使用）を併用する（4・5 章）．以上を踏まえ，農家・非農家間の社会関係の特性の把握と課題の考察を行う。

Ⅲ．非農家の入村の実態および大潟村に存在する社会関係の実態

非農家には，商店の住民，村内勤務者（役場職員など），村外勤務者（会社員など）が存在する．村内勤務者・村外勤務者は大潟村の生活環境に惹かれ入村している．1980 年代前半までは村内勤務者がほとんどであり，非農家のみの住区に居住していたが，現在では村外勤務者も増え，農家・非農家混住区も増えている．商店の住民は，1974 年と 1975 年に入村し，商店街を形成している（現在 10 店舗）．

また，大潟村における社会関係は表 1 にある 6 種類に分類できることが明らかとなった．

表 1　大潟村における社会関係

仕事	農業生産に係る関係，職場における関係（村内外問わず）
子供	村内のPTA・子供の部活動を通じた親同士の関係
サークル	村内の趣味の会・県人会などにおける関係
自治組織	村内の青年会や婦人会など自治組織における関係
村内近隣	村内での幼馴染や近隣住民との関係
村外関係	村外での同級生などの関係

Ⅳ．非農家のもつ社会関係

対象者を非農家男性，非農家女性，商店街の住民に分類し，ネットワーク指標，5 名以内の「日常的に行き来し，よく交流[注1)] している相手」の属性と関係の項目で社会関係を分析した。各対象非農家の SNA 結果を表 2 に示す。

1．全体的傾向

非農家男性は「仕事」を通じた同僚 (非農家) との交流を中心にしながらも，「サークル」「子供」を通じた農家との交流が行われている．

非農家女性は「仕事」を通じた同僚 (非農家)

*東京農工大学大学院農学府　*Graduate School of Agriculture, Tokyo University of Agriculture and Technology
**東京農工大学大学院農学研究科　**Institute of Agriculture, Tokyo University Of Agriculture and Technology
キーワード：八郎潟干拓地，社会関係，社会ネットワーク分析

表２　非農家対象者のSNA結果

	記号	ネットワーク指標		「相手」の属性(人)			「相手」との関係(人)					
		次数	密度	農家	非農家	村外	仕事	子供	サークル	自治組織	村内近隣	村外関係
商店の住民	Ⅰ	4	0.33	4	0	0	0	0	4	0	0	0
	Ⅱ	4	1	3	1	0	0	0	0	4	0	0
	Ⅹ	3	0.33	0	0	3	0	0	0	0	0	3
非農家男性	Ⅲ	4	0.17	4	0	0	2	0	2	0	0	0
	Ⅳ	5	0.1	4	1	0	3	0	1	1	0	0
	Ⅴ	4	0.33	2	0	2	2	2	0	0	0	0
	Ⅵ	4	0.17	2	2	0	2	0	0	0	2	0
非農家女性	Ⅶ	5	0.6	4	1	0	2	0.5	2.5	0	0	0
	Ⅷ	5	0.3	4	0	1	0.5	3.5	0	0	0	1
	Ⅸ	3	0.33	0	0	3	3	0	0	0	0	0

注１）Ⅰ・Ⅲ～Ⅵ・Ⅹは男性，Ⅱ・Ⅶ～Ⅸは女性
注２）次数は0～5の値をとり，持っている関係の多さを表す．
注３）密度は0～1の値をとり，持っている関係の密さを表す．

との交流と，「サークル」「子供」を通じた農家との交流が同程度に行われている．また非農家男性に比べ農家と密度の高い関係を持っている．

商店の住民は，店の常連客という関係をきっかけに「サークル」「自治組織」による農家との交流が密度の高い関係で行われている。

２．個人の一例（Ⅷ氏）

学校教員であるⅧ氏（54 歳，女性）を事例として取り上げる．Ⅷ氏は近隣市町村に住んでいたが，共働きで夫婦の勤務地の中間地点であることなどから，1989 年に夫・子供と共に混住区の村営住宅に入居した．

SNA を用いた現在のⅧ氏の社会関係構造図を図 1 に示す．次数は 5，密度は 0.30 であり，村内では農家のみが「相手」にあげられている。その関係の多くは「子供」を通じた関係（3.5）であり，密度が高く交流が行われている。これは子供の部活を通じて親同士の交流へ発展し，子供が卒業した現在でも親の会として定期的に集まっているものである．同会のメンバーとは「家族構成が似ているから，子供への悩みどころが似ているため話が合う」という．なお，サークルは活動時間が仕事と重なっているため参加できていない．一方で村外に居住する中学時代の部活仲間があげられ，「村外関係」（1.0）が村内とは別の精神的な拠り所となっていると考えられる。

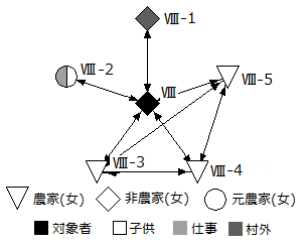

図１　Ⅷ氏の持つ社会関係

Ⅴ．農家のもつ社会関係の全体的傾向

農家男性は，同級生や青年会などを通じた村内に広い社会関係を持っている．そのうえで，営農方針が合う農家との販売組織や，趣味が合う仲間とのサークル活動が行われている．

農家女性は「村内近隣」「自治組織」といった地縁的なつながりができており，特に「子供」を通じた交流を構築している．また「相手」と複数の社会関係が存在していることが多い。

Ⅵ．農家・非農家間の社会関係の特性と課題

農家の多くが世代交代(入植 2 世)した現在でも全体的には依然として農家・非農家間の「活動時間・話題が合わない」などの精神的な“壁”が存在している．実際に，農家同士では「村内近隣」といった地縁的な関係が構築されているが，そのなかに非農家は含まれていない．一方，個人レベルでは「子供」「サークル」などを通じた交流があることから，それらは“壁”を越えた農家・非農家の関係の構築・維持に影響を与えていると考えられる．特に「子供」を通じた関係は，子供が卒業し関係の必要性がなくなっても維持されており，持続的な農家・非農家間交流に大きな役割を果たしていると考えられる。

課題としては，婦人会など農家しか参加できない自治組織が多く存在し，持続的な農家・非農家間交流に繋がっていないことがあげられる．

Ⅶ．おわりに

本研究では，大潟村における農家・非農家個人の持つ社会関係の形成過程と構造の解明を，定性的分析とともに定量的分析（SNA）を用いることにより，具体的かつ実証的に行った。これらを通して，農家・非農家間の社会関係の特性と課題を析出することができた。

注釈

注１）ここでの交流とは，一緒にお酒を飲む，茶飲み話をする，同じ趣味に興じる，重要なことを相談するなど．

参考文献

１）大潟村 (2010)，『大潟村総合村づくり計画』，pp.94-95
２）地域コミュニケ-ション研究会(1975)：「大潟村の地域特性とコミュニケ-ション(1)--大潟村の社会構造--」『国民生活研究』 15(2)，1-25
３）地域コミュニケ-ション研究会(1975)：「大潟村の地域特性とコミュニケ-ション(2)--大潟村の意識とコミュニケ-ション--」『国民生活研究』 15(3)，1-23
４）松岡昌則(1991)：『現代農村の生活互助--生活協同と地域社会関係--』御茶の水書房